九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

馬琴と逍遥 ： 「肚裏」をめぐって

西田, 耕三

https://doi.org/10.15017/4742030

出版情報：雅俗. 14, pp.21-36, 2015-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

◉論考

馬琴と逍遥 ―「肚裏」をめぐって

西田　耕三

一　『八犬伝』の肚裏

坪内逍遥が『里見八犬伝』（以下『八犬伝』）に異議をとなえる理由には、八犬士の行為が仁義八行に縛られていることだけでなく、八犬士の心の内に悩みも逡巡もないという点にもあった。「八犬伝中」の八犬士は「仁義八行の化物」と言い切った逍遥は、この作は、勧懲を主眼として評するなら好稗史と言うべきだが、人情を主脳として論ずるなら「瑕なき玉」とは言えないとし、その理由を次のように述べる。

彼の八主公の行を見よ否其行為ハとまれかくまれ肚の裏にて思へる事だに徹頭徹尾道にかなひて曾て劣情を発せしことなし矧や一時瞬間といへども心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて闘ひたりける例もなし（略）蓋し八犬士ハ曲亭馬琴が理想上の人物にて現世の人間の写真にあらねば此不都合もありけるなり（『小説神髄』上巻「小説の主眼」。明治文学全集『坪内逍遥集』所収。ただし振り仮名は省略したところがある。）

逍遥は、八犬士に意馬心猿の迷いや妄念がないことを、「矧や一時瞬間といへども心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて闘ひたりける例もなし」と強調する。小説に「現世の人間の写真」を求める逍遥にとって、この批評自体は至極当然のことなのであるが、その批評の根本をなす『八犬伝』の読み方はどうなっているのだろう。

上野国荒芽山の麓に音音と嫁の曳手・単節が暮らしている。信乃、現八、小文吾、荘助が武蔵からやって来る。白井城の扇谷定正を襲って失敗した道節は、家来筋の音音の家にかくまわれている。道節を追って白井城の勢力が音音の家を襲撃し、火をかける。その混乱の中、犬田小文吾は、「曳手単節を合鞍に」乗せた馬を樹につないでおいたことを思い出し、彼女らの救出が急務と考える。「彼方へは、火のまだ移らずと覚るに、かの災を脱るゝとも、敵の為に擒となならば、後悔其処にたちがたし。さはあらずや、と肚に問、腹に答ていちはやく」駆けつける。しかし、敵の雑兵や近辺の野武士に妨げられ、馬とともに二人を見失ってしまう。その後の小文吾の後悔は次のように記される（第五十一回。以下『八犬伝』の引用は小池藤五郎校訂の岩波文庫によるが、振り仮名は省略したところがある。また、版本によって訂正した箇所もある）。

百千の国も万みな、火宅なりきと悟りたる、おくこそ知らね無量劫、数尽されぬ煩悩の、俺にも狂ふ意馬心猿に、胸の靭を取留て、曳手単節が存亡も、往方も定めなきまでに、かさね〳〵し憂事に、

身の疲労すら忘草、路の秋草踏わきて、索ぞくらす壮士が、心の誠比なき。犬としいへば八の数、十日に近きふみ月の、筆に載てん是仁惟義、忠信礼智孝悌を、磨あげたる玉にしあれば、いづれ疎鹵はなかりけり。

小文吾にもまた「俺にも狂ふ意馬心猿」の煩悶があった。しかし、逍遥はそのことを顧慮しない。小文吾がその煩悶をのりこえて、苦労しながら二人の行方を尋ねたこと、および作者が、小文吾の行為を八犬士の「筆に載てん是仁惟義、忠信礼智孝悌を、磨あげたる玉にしあれば、いづれ疎鹵はなかりけり」というふうに、「仁義八行」に吸収してしまったことを気にするのである。しかし、小文吾の意馬心猿は事実である。意馬心猿をもたらす情も自然なものである。それを外からどのように整序づけても、そのことは変わらない。逍遥はそこを見ないで、馬琴自身の整序づけ、意味づけに反応する。そういう読み方なのである。勧懲を中心にして読み、人情を主としては見ないからさきのような評価になる。

『八犬伝』には「肚裏」という言葉が八十例ほど出てくる。「はらのうちに思う」という意味の言葉は別に珍しいものではないが、「肚裏」は、『八犬伝』を一読すれば、その多さが心に残る言葉の一つである。逍遥の批評を意識しつつ、本稿では『八犬伝』を中心に「肚裏」という表現をめぐってみたい。まず、『八犬伝』の「肚裏」の出現の初発の段階の推移を確認しておこう。

結城合戦で負けた足利持氏の子春王・安王は管領方の長尾因幡守に護送されて京都へ向かう。途中、京都将軍の命令で、美濃樽井の道場金蓮寺で殺される。変装して一行に紛れこんでいた大塚匠作は、躍り出て首切り役の錦織を切り殺すが、もう一人の首切り役の牡蠣崎に殺される。また、ひそかに一行をつけていた匠作の子の番作は二人の公達と父の首を持ち、牡蠣崎を斬り伏せ、名乗りをあげて一行と闘い、暗夜にまぎれて行方不明となる。次は匠作の思いにもかかわらず、兄弟の公達が殺される箇所である。

憤然として思ふやう、三面六臂あればとて、この期に及びて公達を、救ひ奉るべうもあらず。殉腹切らんは易けれども、せめて当座の讐敵、長尾を撃てわれ死ん。いな〳〵彼処は間遠なり。もしそんじてはその詮なし。よし〳〵牡蠣崎錦織なり共、主君を害する怨はおなじ。這奴等なりとも討果して、いでや黄泉のおん郷導、仕らんと、肚裏に、尋思の臍を固めつゝ、刀の鞘釘舐湿して、西へ遶り、東に居なほり、やゝ近づかんとする程に、二人の大刀とり矢声をかけて、晃かす刃の光に、憐むべし。両公達の、御頭顱は磯と地に落たり。（第十五回）

匠作の「と、肚裏に、尋思の臍を固めつゝ」が『八犬伝』における「肚裏」の最初の例である。これは、「憤然として思ふやう」が匠作の心内に前置されていて、「肚裏」そのものは心内語のあとに記される後置の例である。

（信乃の太刀を奪ったあと、信乃を片づけたい大塚蟇六は）只真成に欺待して、由断さするにますことなし、と腹裡に深念しつ。亀篠にのみ機密を告て、斯謀るにぞありける。（第二十二回）

これも「腹裡」が蟇六の心内のあとにくる後置のためなのか、心内の現前性は弱く、まだ叙事的であると言っていい。次に「肚裏」が現れるのは、少し間をおいて第四十二回以後になる。

（大塚の城主大石兵衛尉の陣代丁田町進は額蔵を拷問するが、ききめがない。あせる思い）「（略）もし幻術を得たらんには、思ひの随に責さして、脱去ることもやあらん。はやく殺すにますことなし。」と肚裏に尋思しつ、遂に使者を鎌倉へ遣して、主の大石兵衛尉に、讞獄の趣を訟るに、（第四十二回）

（信乃と現八が額蔵を救おうとする。検監の卒川菴八が）遙にこれを見て、「敵は纔に両人なれども、獍雄当りがたければ、禦ぎもあへず額蔵を、奪ひ去らるゝ事もやあらん。彼奴をはやく結果て、後やすくするこそよけれ、」と腰裡に尋思しつ、遺たる竹槍とり揚て（第四十三回）

これらも後置の例である。「肚裏」に「尋思」（深念）が接続する形が多い。

（道節は四人の旅客が自分の闘いの場に出てきたために自分が助かったことに忸怩たる思いがして、その闘いの場に戻ろうとする）いでや彼処へ走り還りて、旅客等を拯ひてん。拯ひ得ずともその人々と、共侶に死なば、生るに勝れり。吁しかなり。」と肚裏に、思ひ決めて遽しく、緩みし帯を引締びつゝ、裳を褰げて驀直に、旧の処へ還りて見れば、（第四十五回）

この例は「肚裏」に「思ひ決めて」が接続する。「肚裏」の初出である第十五回の「肚裏に、尋思の臍を固めつゝ」にも「思ひ決めて」の意味が含まれている。心内の現前性は、基本的には心内の力によるのだが、文章の流れの一般的傾向として、「肚裏」が心内語の前にある方がより強くなる。後置の場合は前述のように心内も叙事の一環に組み込まれていく傾向が強い。『八犬伝』では全体として前置の形が多いのだが、その初出は次のように第四十六回になってからである。

荘助は塚の蔭より、透し見れどもその意を得ず、肚裏におもふやう、「この癖者が齎して、旧塚を祭れるは、引剥せし臓物を、邪鬼に供養して、なほ造化を願ふならん。這奴憎むべし、憎むべし。先うち驚して、試して見ばや。」と石塔の間より手を出し伸して、（第四十六回）

以後、「「遮莫、烏合の山賊、なほ外面に集ふとも、いかばかりの事やはせん。さは遺りなく引よして、鏖にしてくれんず。」と忽地腰に尋思をしつゝ、些も動かで旧の儘に、手を叉きて息もせず」（第四十七回）という後置の例をはさみつつ、次のような形が確立されていく。この「腹裏におもふやう」が『八犬伝』の「肚裏」の基本の形と考えてよい。

小文吾はこれらによりて、腹裏におもふやう、「こゝのあるじが為体、百姓ならず、商人ならず。抑亦何をもて、生活にするやらん。」（第五十二回）

といふに駭く小文吾は、なほさりげなく応をしつゝ、肚裏に思ふやう、「原来かの日に夕饌を、もて来てすえたる男童の、品七が長物がたりを、幾條か聞とりて、主の常武に告しより、常武いたく品七を、憎みて毒殺せしならん。（略）」（第五十五回）

常武頻りに太息を吻て、肚裏に思ふやう、「原来昨夕季六は、返撃にせられしを、小文吾がその死骸を、水に沈めて隠せしならん。（略）」（第五十七回）

ところで、『著作堂旧作略自評摘要』（天保十五年著作）によれば、馬琴は『月氷奇縁』について、「もしこの書を『八犬伝』五六輯以後の

文をもて綴り、綉像を国貞に画せ、筆耕を谷金川に課せなば、拙筆中第一番の好書なるべし」と考えていたらしい（神谷勝広・早川由美編『馬琴の自作批評』による）。『八犬伝』五輯（第四十一回から第五十回まで）は文政六年刊、六輯（第五十一回から第六十一回まで）は文政十年刊である。馬琴がこの自評を書いた天保十五年は『八犬伝』擱筆後二年たっている。「もしこの書を『八犬伝』五六輯以後の文をもて綴り（略）拙筆中第一番の好書なるべし」という評価と、「肚裏」が第五輯以後多く使用されることと無関係とは言えないように思われる。「肚裏」の多用は、前述の理由のほかに、小説が叙事的なものから、小説世界が現在し、読者の眼前に展開することに寄与するからである。

しかし、『八犬伝』において、「肚裏」それ自体はおおむねそれぞれの登場人物にとって天下の公道のように存在した。「肚裏」を隠匿する場合でも、天下の公道に木の影が射すという程度のことにすぎなかった。対他関係に何らかの変容や意外性をもたらすものではなく、あくまでも対自的に心を整理する場であった。決断へいたるプロセスの場であった。それは「肚裏」だから当然である、ということではない。たとえば、『八犬伝』において悪人が悪意を抱くのは悪人だからであって、「肚裏」が悪意の醸成の場にはなっていない。そういう意味である。善人についても同様である。つまり、「肚裏」の前後においてドラマは生じるが、「肚裏」においてドラマは生じない。悪意や善意や情報の確認が生じるだけである。

ではなぜ肚裏は多用されたのであろうか。ここで江戸時代における心の基本的な理解を思い出しておこう。

人心、主を作し定めざれば正に一箇の飜車流転動揺して須臾も停まること無きが如し。感ずる所万端なり。若し一箇の主を做さずんば怎生ぞ奈何せん。（「近思録」巻之四）

心が意馬心猿の如きものであることは現在でも真実だが、私たちはそれを思考や倫理の新鮮な参照項として常に考えているわけではない。しかし、江戸時代の思考と倫理において、「感ずる所万端」は目の前にあって常に参照すべき認識だった。「動揺して須臾も停まること無きが如」き心は社会の整序下におかれなければならなかった。この認識が「肚裏」のもっとも根本にある動因だったと考えられる。

犬飼現八が庚申山の妖猫を退治しようとする場面は第六十回で描かれる。『八犬伝』の内部で「肚裏」は自由に振る舞いはじめているように見える。

さらでも闇き樹木蔭に、前路もわかずなりしかば、こころ有繋に安からぬ、肚裏に思ふやう、「かゝるべしとは知らずして、烏夜に要なき弓箭より、買ふべきものは松明なりしを、噫悔しくも脱落にけり。任地神子内より、巓村へは路程、一ヂ里半道ありとか聞り。既にして神子内より、二十余町も来つらんに、こゝより進むも退くも、路に損益なかるべし。（略）」（第六十回）

現八は「烏夜に要なき弓箭より、買ふべきものは松明なりしを、噫悔しくも脱落にけり」と後悔する。その後悔が表現される場として肚裏が設定されている。そして出あった妖猫に対し、「現八は彼為体を、はや見定めてなか〳〵に、些も騒ぐ気色なく、心の中に思ふやう、「彼馬に騎たるこそ、妖王なるべけれ。先にすれば物を征し、後るゝときは征せらる」」と勇気を奮い起こす。現八はここで妖猫との戦い方を思案し、決断する。この「心の中に思ふやう」は「肚裏に思ふやう」と

同じ状況、同じ文脈、同じ意味で使われている。

と呼かけられて現八は、些も擬議せず見かへりながら、肚裏に思ふやう、「彼奴が甘言をもて、誑引寄せんと欲するとも、いかばかりのことやはする。且試て時宜に依る、術こそあらめ。」と尋思をしつゝ、勇気を示す声高やかに、「浮世に遠き深山幽谷、人の住むべき所ならぬに、和主は妖怪ならずといふか、尓らば亦これ何ものぞや。」と詰問つゝ立対へば、（第六十回）

本文に明示するように、「肚裏」は思案の場であり、行動へ向かう場であった。逍遥の言う意味での「道理力と肚の裏にて闘ひたりける例」とまでは言えないが、「肚裏」は透明のままでその基本的な対自の機能は果たしているように見える。

ではあらためて「肚裏」の積極的な意味は何だろうか。次の例は毒婦船虫と善人、大の「肚裏」である。

現窮寇は敵を択まず、窮女は夫を択まずといふ、鄙語に似たる船虫は、聞つゝ肚裏に思ふやう、「繋ぬ船の楫を絶て、よるべの岸もなきこの折に、偸児なりとて承引ずば、俺身は矢庭に殺されん。後はともあれ望に任して、従ふときは憂を転して、驩と做すに庶かり。思念に及ぶことかは。」と胸を決めてうち頷き、（第七十五回）

恁而、大は旅舎を出て、ゆくこと又只一日ならず。肚裏に思ふやう、いぬる日酒家、石禾なる、指月を退院しつる折、那四犬士に言を遺して、穂北の宿所で俟んず、と約束をしたれども、つら〳〵思へば穂北の長なる、氷垣残三夏行は、原是結城の落人にて、嘉吉に篭城せしものなり、と伝聞ぬることしもあるを、立寄て逗留せば、夏行必大念仏の、施主にならんと請ふなるべし。（略）

と肚に問ひ、腹に答つゆく程に、分別既に決りければ、穂北の荘を過りしかども、氷垣が宿所へ立寄らず、其頭は笠を傾けて、連りに路次をぞいそぎける。（第八十七回）

船虫にとっても、大にとっても、「と胸を決めてうち頷き」や「分別既に決りければ」というふうに、我が決断・決心を固めていく過程が肚裏において展開する。「肚裏」に善人悪人による区別はない。みずからがみずからの心の決断に向かっている。「分別既に決りければ」が『八犬伝』の「肚裏」のはたらきの基本と考えてよい。語り手の主導による叙事ではなく、登場人物の意志が物語を進めていく。そのように書かれている。

、大は、「路次をぞいそぎ」ながら、「肚に問ひ、腹に答つゆく程に、分別既に決りければ」、氷垣残三夏行には会わずに過ぎてゆく（第八十七回）。その「肚裏」の表現の核心は「肚に問い肚に答える」という自問自答に集約することができる。さきにあげた荒芽山の麓での小文吾もそうだった。同様の表現を摘記しておこう。

荒芽山の事件のあと一人はぐれた犬飼現八は、他の犬士を探して信濃路を巡るも会えず、下総の小文吾にも会えない、こうなったら武蔵に戻って何とかするしかないと思う。その状態が、「と思ふ心を肚に問ひ、腹に答へて身を起せば、秋の日影の短くて、はや曛昏になる物から」（第五十九回）と描写される。稲戸由充が、かつて犬川荘介と犬田小文吾に与えた刀が幾変転ののち自分のもとに戻ってきたことを、「人に告ぐべき事ならねば、只肚に問ひ腹に答て、感嘆の外なかりけり」（第八十一回）。蟇田素藤は、金を盗んで逃げた手下の卒八を見つけて殺し、金も取り戻したが、世間が狭くなり、「夜は深るともこの川

を、渡して別宿を求るに、しくことあらじと肚に問ひ、肚に答る身の往方、思ひ決めつ、卒八が、屍骸を川へ蹴落して」またさまよい出る（第九十八回）。絵馬師の竹林巽は、誤って自分の妻を殺した樵六を撲殺する。しかし、妻を失ったうえに、妻殺しの罪もかぶるのではないかと恐れ、「他郷に走らば厄解けて、今の憂苦を後竟に、昔語に做すまでの、幸なからずや、と肚に問ひ、肚に答て遽しく、先四下を見匝すに」（第百四十二回）。犬飼現八は川に流れていた死骸を引き上げる。犬江親兵衛の神薬で蘇生するかどうか、親兵衛に問うしかないと、「肚に問ひ腹に答て、主意既に決りしかば」（百七十回）。ここで現八が「肚に問ひ腹に答て、主意既に決りし」顛末を見ておこう。

対管領戦で、犬飼現八は敵を追って仮名町の陣から移動する際、川に浮かんでいる一人の武者の死骸を見つける。敵の大将然とした武具を身につけている。現八は「訝りて、肚の裏に思ふやう」、昨日の闘いの様子では、敵兵が川に落ちて溺死することは考えられない、詳しく調べなければと、「尋思をしつゝ」死骸を引きあげる。扇谷定正の嫡子の朝良か、庶子の朝寧であろう。そして、その死骸に刺さっていた矢に、「犬山忠與」という字を見つける。「現八憶ず愕然たる、肚裏に又思ふやう」、昨日犬山道節と闘っていたのは朝寧ではないか。現八は犬江親兵衛の蘇生の神薬を頼ろうとする。「犬江が神薬なりとも、救ひ得がたかるべけれ、とは思へども先親兵衛に、告て商量するには不如と、肚に問ひ腹に答て、主意既に決りしかば」、親兵衛の所へ連れて行き、蘇生させるのである。「肚裏」が話の展開に奥行を与えていることが感じられるだろう。

以上の例を見ても、「肚に問い、肚に答える」表現も善人悪人によらないことがわかる。まさしく、たとえば犬塚信乃が、祖父匠作の刀を長い歳月の後に得るという不思議を「肚裏なる自問自答を、言には出さで然気なく」（第百八十回上）思い返す場として「肚裏」はあったのである。巨視的に見れば、今の信乃の引用箇所の直前で、かつて父が母と出会った庵室に立ち寄ることになった犬塚信乃の述懐、「一善一悪人おなじからず、一去一来其地は同じ」（同上）と同様の展開が「肚裏」という場でも行われたということもできるだろう。

かつて、八房の子を孕んだことを恥じた伏姫があれこれ悩み、入水することを決意しようとして、「とわれに問、われに答てやうやくに、思ひ決めつ」ということがあった（第十三回）。網乾左母二郎は、信乃の太刀を室町将軍に献上し、浜路を誘い出すことを決心するさまは、「吁しかなり、とわれに問ひ、われに答へて濁江の」というものであった（第二十七回）。また、額蔵（のちの犬川）は、犬山道節の玉に「忠」の字があること、我々には神の冥助があること等、「自問、みづから答て、手拭をもて、痍を包み」と描写される（第二十九回）。お尋ね者となった信乃を小文吾は計策が浮かばず、「いかにすべき」「と胸に問ひ、胸に答て憂かず〳〵の、おもひは余りあり明の」という状態があった（第三十五回）

この「われ」や「みづから」や「胸」が、いま「肚裏」に転化しているのである。「われ」「みづから」「胸」と「肚裏」の間にもし微細な違いを見ようとすれば、「肚裏」は「われ」「みづから」「胸」の奥深く入り込み、登場人物に奥行きをもたらしていると評してもよいことになるだろう。

二　拡散する肚裏

本節では、『八犬伝』以外の例を含めて、前節で述べた型以外の「肚裏」の使用の諸相を見ておこう。『近世説美少年録』（日本古典文学全集の徳田武の校注本による）『開巻驚奇侠客伝』（新日本古典文学大系の横山邦治・大高洋司校注本による）ともに二十例をこえる「肚裏」を使っている。

肚裏の中味は現前することによって緊張感をます。しかし、読本は叙事が基本であるから、肚裏が現前性を獲得したあとも、叙事は肚裏に侵入する。ここで現前性を獲得する前の記述と思われる『朝夷巡島記』の例と、獲得したあとの記述と思われる『八犬伝』の例をそれぞれ示してみよう。

腹裡におもふやう、「稲村小壺の浜辺などには、安房上総へわたす船、毎日ありと予て聞ども、彼処は無下に程近かり。苫葺、帆なみ繕あへず、君所の人々追蒐来て、引涙されなば、ほゐなき所為なり。金沢なる野島へいゆかば、追ものありともこゝろ得つかで、輙く前面へわたすべけれ」と忽地に尋思しつ、東を投て喘々足に信して走るものから（『朝夷巡島記』初輯第二「月夜の竊立鳥／鶏鳴の野島船」。文化十二年刊）

と叮嚀に、いはれて奈四郎歓ばず、肚裏に思ふやう、「われ頃日は猟にも出ず、四六城が宿所へ立よりて、夏引にもあはざるは、今初てその名を聞し、彼犬塚信乃とやらんに、主従いたく打れたる、面目なきによりてなり。然るを翌又宿所に招きて、彼奴と一席にて、酒を勧んといふ木工作は、又是信乃が方人にて、飽までわれを破滅に付ん、と較計たるにぞあらんずらん。尓りともゆかじといはゞ、われ只後れたりといはれん。その意に任し彼処に到りて、倘堪がたき事あらば、信乃と木工作一家の男女を、鏖にして逐電せん。三十六計詐欺を上とす。嗚呼尓なり。」と思ふ心を、気色にだにも顕さず、頻りに頷き含笑て、（『八犬伝』第六十九回）

『朝夷巡島記』の例の場合は、木曽義仲の子を託された栞手という女性が、鎌倉から安房へ渡ろうとする緊迫した場面であるが、肚裏の内実は土地の説明という趣きが強い。つまり、「肚裏」でなくてもいい情報なのである。『八犬伝』の奈四郎の肚裏も叙事的ではあるが、信乃に対する奈四郎の心内に即している。しかもその心内は、「と思ふ心を、気色にだにも顕さず、頻りに頷き含笑て」というふうに、他に隠匿する肚裏の性質を十分に備えている。この隠匿の要素の有無、強弱が「肚裏」をはじめとする心内表現を際立たせる指標となる。

隠匿する肚裏はまず他から忖度される対象となる。

尓るに似而非頭陀、大とやらん、近曽這地に庵を締びて、嘉吉の役に戦死したる、列将士卒の菩提と倡て、一座の石塔婆を建立し、出処不定の禿驢を聚めて、念仏供養しぬるのみならず、施行の報條を衢衢に貼して、恩を貧民乞児們に、施さんと欲するは、只是烏滸の所行ならずや。畢竟我寺はさらなり。領主結城殿をも、蔑如にしたる結構、その肚裏、料りがたかり。（『八犬伝』第百二十五回――結城の城下逸足寺の住持徳用の言葉）

御憤は然ることながら、臣等事の勢によりて、那肚裏を推量り候に、定正も顕定も、底意には我君（足利成氏――引用者注）を、推尊ざるにあらねども、近国の諸将来会したれば、其兵権を失

はじとて、胡意恭敬の礼を尽さず。（『八犬伝』百五十九回――横堀在村の批評）

これらは対象となる人間の肚裏（前者は、大、後者は扇谷定正・山内顕定）を忖度するという状況を描いており、次の例は逆にみずからの肚裏を省みて「肚裏には無辺無量の、妄想、涌出」する状況を描いて対照的である。

然ば亦泰勝も、姑摩姫を見つ、垣衣を、この日初て見出して、驚くまでに眷惚れたる、涎の眼鏡に伝ふを覚ず。肚裏には無辺無量の、妄想、涌出しぬれども、後方に侍る楠の、若党がうち咳くに、胆を潰しつ、（『開巻驚奇侠客伝』第三十八回）

そして、「肚裏には無辺無量の、妄想、涌出」するからこそ、次の例のように、「進退は肚裏に在り」ということになるのである。落城した武田信隆が、甲斐の武田信昌を頼る。信昌は管領方への加勢を躊躇している。信隆は、一応管領方へ兵を派遣し、実際は管領方へも里見方へも加勢せず、自利をはかることを進言する箇所である。

「然ゝ候。計は密なるを可とす。機に臨み変に応ずる、進退は肚裏に在り。この事倘果さずして、祟御身に及ぶべくは、在下みづから刎て、幷を齎して、謝しまつらん。時は得がたくて、喪ひ易かり、いかで饒させ給ひね。」と天地に誓ひて請ひしかば、（『八犬伝』第百五十九回――武田信隆の言葉）

扇谷定正が里見勢を討つために五十子城を出るという報告を受けた犬山道節は、はさみ討ちにできると喜ぶ。次はそれに対する信乃の「進退は肚裏に在り」である。

登時信乃は肚裏に、一計を思ひ起せしかば、道節に悄語くやう。「定正みづから緝捕の輿に、多勢を将て出て来ぬるとも、五十子の城内には、なほ二三千の士卒あるべし。然ば和殿の計るがごとく、定正前後に敵を受て、敗北に及ん折、その支はやく城内へ聞えなば、多く加勢の兵を、出さゞることあるべからず。その折躬方は小勢なり。神煞忽地方位を易て、勝利反て大敗とならん。洒家一箇の籌策あり、箇様々々に行はゞ、五十子の城を拿んこと、樹を抜き枝を払ふより、易かるべし。」と解示せば、道節斜ならず歓びて（『八犬伝』第九十四回――信乃の計略）

次は樅次郎がみずからの長い話の中でみずからの肚裏を引いている一コマである。

「己肚裏に思ふやう、『領主の所望は情慾にて、然る媒妁は、我本意にあらず。とは思へどもいかにせん、曩に我弟八重作が、酔ふて人と闘諍して、敵手に深痍を負せしをり、郡司殿の好意にて、その事輒く平ぎたる、彼恩なしとすべからず。矧又這刀禰は、武を嗜み力士を愛して、我身も時々召るゝに、今憑るゝ一条を、つれもなく推辞稟さば、情義両ながら欠るに似て、必や怨られん。只受引にしくことあらじ』と思ひ復して答るやう、」（『近世説美少年録』第五十一回）

「倶に肚裏に思ふやう」という不思議な表現もある。叙事から現前へと機能した「肚裏」がここで、心のうちという「肚裏」の意味を逸脱して、再び叙事へ転回する。

と喞言がましく頼陳じて、哀請ふて已ざりければ、有司は憶ず面を照して、倶に肚裏に思ふやう、「現這木造泰勝は、不行状の癖者なれども、（略）」（『開巻驚奇侠客伝』第十八回）

かくて其詰朝、小忠二措名は、阿鍵老苧の剃髪の義を聞知りて、俱に肚裏に思ふやう、「阿夏の老苧は、左まれ右まれ、我刀自（阿鍵をいふ－割注）は、郎君子（大夫五をいふ－割注）の、存亡いまだ安定ならぬに、剃髪は早からずや」といふにいはれぬ時誼なれば、度外に措て疑はず。（『近世説美少年録』第四十五回）

「有司」は複数である。その有司が顔を見合わせて、「俱に肚裏に思ふ」。小忠二と措名の場合も同様である。阿夏（老苧）と阿鍵の剃髪に関する「肚裏」である。

次の例はほとんど坪内逍遥の『新磨妹と背かゞみ』の「肚の裏」（後述）と同じ悪意を含んでいる。しかし、持永の肚裏は持永のたわいのない批評であって、強烈な対他意識による悪口ではない。

登時持永は、膝を找めて、這母女を、見つ、聞つ、つく〴〵と、肚裏に思ふやう、「共に楠氏の流を汲む、這苫子と姑摩姫は、是従父姉妹なれども、那は才色両全にて、愛たき吉祥天女也。這は相貌無双の醜悪、小児の啼を禁むべき、黒暗天女の来迎にて、興も酒も醒果たり。淫に置しく慾に渇する、皆男嶋なる夷狄でも、こを見ば鼻を撮みて逃ん。さても〳〵」、とばかりに、呆れて嘔吐に堪ざりしを、然気も見せずうち笑て、（『開巻驚奇侠客伝』〈ドラクロト〉第三十八回）

小雪太は「折を得たり」と軈て納戸に潜入りて、小箪笥に蔵めたる、金五十両を窃拿りて、懐に琥と夾め、己が子舎に退きて、肚裏に思ふやう、「這金にてはまだ足らねども、多貪は破敗の基なれば、今宵這頭に火を放ちて、事の紛れに脱去らばや」と単計較程もなく、（『近世説美少年録』第五十五回）

この小雪太の「肚裏」のはたらきには、江戸時代の悪が集約されている。それ故に、持永とはまた別の局面で明治への橋渡しの趣きを持っている。しかしそう考えるのは、小説の中で、小雪太を一個の自立して動く個人と見るからであろう。小雪太はまず「悪人」なのであり、悪人だから悪を増殖させているにすぎない。悪もまた天下の公道であり、そこに射した影が一瞬揺れたにすぎないのである。

三　水滸伝の肚裏

『八犬伝』の「肚裏」は『水滸伝』の「肚裏」を踏襲したものであろう。『水滸伝』に二十例ほどある「肚裏」のうち、最初に出てくる第一回の「肚裏」について、原文、訓訳、和訳（岡島冠山・曲亭馬琴）を順に見ておこう。

一（原文）

這洪大尉（略）正走不動、口裏不説、肚裏躊躇、心中想道、「我是朝廷貴官公子、在京師時、重裀而臥、列鼎而食、尚兀自倦怠、何曾穿草鞋走這般山路

（幸田露伴訓訳――「国訳漢文大成」の『国訳忠義水滸全書』による）

洪大尉が山中を歩き疲れて「口裏には説かざれども、肚裏には躊躇し、心中に想道らく、我は是朝廷の貴官なり、京師に在る時は、裀を重ねて臥し、鼎を列ねて食ふも、尚兀自から倦怠す、何ぞ曾て草鞋を穿つて、這般の山路を走らん…」（水滸伝第一回）

（岡島冠山訳――『通俗忠義水滸伝』）

身心疲テ。行走ナリガタケレバ、躊躇シテ想道我ハ是レ朝廷ノ貴

官ナリ。京ニ在ルトキハ、裀ヲ重テ臥シ鼎ヲ列テ食ニサヘ、尚且倦怠ス。奚ゾ布衣ヲ著シ、麻鞋ヲ穿、如レ此山路ヲ経ヤ

なお、陶山南濤『忠義水滸伝解』のこの項「肚裏躊躇」の解を引けば「肚ハ腹也腹ノ中ニテトヤカクト思フナリ」。また「想道」の「道」については、「道ハ付字ナリ覚道尋思道知道聞道ノ類ナリ是モ一字ニテハ呼ニクキ故ニ道ノ字ヲ付ルナリ」と記す。

（馬琴訳――『新編水滸画伝』）

やうやく身疲こゝろ怠り、しばし停立て思ふやう、われは是高宦の人なり、京師にありける日は、食ふに鼎を列ね、臥に茵を重てさへ、なほ倦怠たる身の、浅ましくも布の衣に麻鞋穿、かゝる山路をたど〳〵しく、ひとり登るは何事ぞ（略）と独言たる折しもあれ

「口裏には説かざれども、肚裏には躊躇し、心中に想道らく」の箇所が、冠山訳では「躊躇シテ想道」、馬琴訳では「しばし停立て思ふやう」となっていて、「肚裏」は使われていない。この傾向は、八の例を除き、この後もほぼ同様である。「肚裏」をそのまま使ったのでは翻訳にならないと考えたのであろうか。以下、馬琴が訳した『水滸伝』第十回までの七例を同様に見ておこう（原文は省略する）。

二（露伴訓訳）

董生薬の家に来り、這の封書を下了す。董将士高俅を一見し、柳世権の来書を看了し、自から肚裏に尋思して道ふ、這の高俅、我家如何ぞ他を安着し得ん、（『水滸伝』第二回）

露伴が「自から肚裏に尋思して道ふ」と訓訳している箇所は、『標註訓訳水滸伝』（平岡龍城著、大正四年刊）は、「自肚裏尋思道」と読み、「尋思道」に「ツラツラヲモフヤウ」と意味を付している。この意味で読むべきである。以下同じ。

（岡島訳）

金梁橋下ノ董将士カ家ニ到リ柳世権カ書札ヲ出シケルニ董将仕カノ書札ヲ開読テツク〳〵思案シケルハ此高俅ト云者ハ聞及ヒシ破落戸ナリ

（馬琴訳）

金梁橋下なる、董将士が薬店に索ゆき、紹介の手書をさし出しければ、董将士読了て、こゝろの中におもふやう、此高俅は、音に聞つる破落戸なるを、今赦免せられしとて、もしわが家にとゝめ置かば、

三（露伴訓訳）

再説す魯智深桃花山を離了し、脚歩を放開し、早晨より直に走つて午後に到る、約莫五六十里多路を走下す、肚裏又饑う、（『水滸伝』第五回）。ここは身体の腹である。五の例も同じ。

（岡島訳）

省略している。

（馬琴訳）

かくて魯智深は、桃花山を離れて、朝まだきより路を走り、既に午後になりしかど、いまだ市井に出ず、約五七十里も来つらんと思ふに、甚饑て物ほしうなりにければ、

四（露伴訓訳）

④那漢朴刀を撚着して来つて和尚と闘ふ。恰も待に向前せんとし、肚裏に尋思して道ふ、這の和尚声音好だ熟すと。便ち道ふ、

兀那和尚、你的の声音好熟す、你姓は甚ぞ。（『水滸伝』第六回）

（岡島訳）
彼漢子急ニ刀ヲ挙テ禅杖ヲ閣住高ラカニ呼テ曰、和尚暫ク禅杖ヲ動スコトナカレ、我和尚ノ声ヲ聞ニ正シク問馴タル声ナリ、速ヤカニ和尚ノ姓名ヲ承ハラン。

（馬琴訳）
禅杖を輪起し、既に打んと走りかゝるを、彼漢声をかけ、和尚の声音おぼえあり、名告れ〳〵と叫べども、

五（露伴訓訳）
⑤智深一には史進を得了して、肚裏膽壮んに、二には乃ち喫し得て飽了し、那の精神気力、越使ひ得出し来る。（『水滸伝』第六回）

（岡島訳）
智深怒テ禅杖ヲ輪シテ打テカゝル。悪僧モ同ク刀ヲ揮テ相迎ヘ闘ヒ已ニ八九合ニ及ビ

（馬琴訳）
魯智深は、一ッには史進を得、二ッには肚裏充満して、精神日来に超たれば、

六（露伴訓訳）
⑥両箇の公人と再び旧路を回り、肚裏に好生愁悶し、半里多路を行了す。（『水滸伝』第九回）

（岡島訳）
即チ彼漢子等ニ相別レ、再ビ旧ノ路ニ出テ、漸々半里バカリ往所ニ、

（馬琴訳）
両箇の公人と、もに旧の路へ赴しが、ふかく望をうしなひて、心の中いよ〳〵楽しからず、行事纔に半里ばかりなる折しも、

七（露伴訓訳）
⑦林冲看了り、尋思して道ふ、敢て是柴大官人ならんや麼と。又敢て他に問はず、只自から肚裏に躊躇す。（『水滸伝』第九回）

（岡島訳）
林冲心ニ想ヒケルハ、彼官人ハ、若柴大官人ニテモヤ、有ルラメト。只顧躊躇シテ仰キ望ム所ニ、

（馬琴訳）
林冲は、これ柴大官人なるべく思ひつゝ、いまだ問に及ず、しばし躊躇てありけるを、

八（露伴訓訳）
⑧林冲自ら肚裏に尋思し道ふ、這の洪教頭は必ず是柴大官人の師父ならん、不争我一棒に他を打飜し了せば、須らく好看ならざるべし。（『水滸伝』第九回）

（岡島訳）
林冲暗ニ思ヒケルハ、家人等都テ、彼ヲ教師ト云ハ、必ス柴大官人ノ武芸ノ師匠ナラメ、我恭シク礼ヲ行ハント思案ヲ定メ、

（馬琴訳）
林冲これを聞て、肚裏にて尋思するに、この洪教頭はかならず柴大官人の師父ならんをわれ立地に打飜さば、却て興を失ふべし、とせんかくせんと躊躇ば、

以上であるが、なお、『水滸伝』本文に「肚裏」がない箇所に馬琴が「肚裏」を使っている場合がある。原文（幸田露伴の訓訳による）と『新編水滸画伝』初編の馬琴の訳を対比させてみよう。

一、（董将士は高俅を小蘇学士に預ける。小蘇学士は高俅を見、さらに董将士からの手紙も読み）、

高俅は原是幇間浮浪的の人なるを知道し、心下に想道す（ここは「心下に想ふやう」と読むべき所である――引用者注）我が這裏如何ぞ他を安着し得ん（『水滸伝』第二回）

こうして小蘇学士も高俅を王晋卿の許へ預けるのだが、この「心下に想ふやう」（心下想道）を馬琴は「肚の裏にて了簡し」と訳している（巻二）。

二、（朱武と楊春が、史進に捕えられた仲間の陳達を救うべく、史進に哀訴する。それを聞いた史進の反応）

史進聴了り、尋思して道ふ（ここも「尋思するやう」と読むべき所――引用者注）、彼們直に恁義気あり、我若他を拿へ去つて官に解し賞を請ふ時、反つて天下の好漢們をして我が英雄ならざるを恥笑せしめん（『水滸伝』第二回）

この「尋思するやう」（尋思道）を馬琴は「肚の裏にて了簡し」と訳す（巻三）。

三、張教頭便ち道ふ、我児放心せよ、是女婿恁的に主張すと雖も、我終に你を将ゐ来つて再び人に嫁することを成申下し得ず、這事は且他の放心し去るに由すのみ、（『水滸伝』第八回）

「是女婿恁的主張すと雖も」（雖是林冲恁的主張）という箇所を馬琴は、「是は林冲が肚裏に、ふかき主張ある事ぞ」と訳している（巻九）。「女婿」は「林冲」のこと。

『水滸伝』の「肚裏」を訳すときは他の言葉で置き換えることの多かった馬琴だが、「肚裏」という言葉そのものには魅力を感じていたのだろうか。

四　逍遥の肚裏

本稿冒頭で記した逍遥の考えは、彼が翻訳した『慨世士伝』の「はしがき」にも見える（明治十八年二月）。

蓋し泰西の小説作者ハ勧懲をもて賓位に置きて専ら人情を写せバなりけり我小説家ハ之に異なり譬ハ一個の人物を假作するにも其人一篇の主公にして善良忠正の人なりとせバあくまで善良正忠にして其行ハいふも更なり心の中にて思へる事だに曾て不正に類する事なくさながら完全無缺にして現に人間世界にてハ亦あるべしとも思はれざる奇偉なる人物ならぬハ稀なり譬バ八犬伝中なる彼の八人の主公の如きハ造次顚沛道にかなひて曾て邪念を抱きしことなくさながら純正純潔なる聖賢其人にも髣髴たり（略）其純潔なる良心をもて心猿を制し意馬をつなぎはじめて善行を完うすべし言行ハ皮相なり情欲は髄なり馬琴犬士が純潔なる皮相の言行を叙したれども曾て犬士が良心もて其情欲をバ制抑せる條を細に叙したる事なしかゝれば犬士ハうまれながらに煩悩情欲を脱し得たる所謂神聖のたぐひならん歟そもまた馬琴が人情をバ穿ちて周到ならざりし歟もし八犬士にして神聖なりせバ是を人間とハいふ可からず已に人間ならざる以上ハ之を人情を旨とするなる小説稗史の主公となすこと極めて不当といはまくのミ

（続明治翻訳文学全集《翻訳家編》4「坪内逍遥集」）

人間ははじめから善行をなすのではない。その裏で煩悩情欲を抑えて

いるのであり、小説はその様を描き出さなければならない。

その煩悩情欲はまず肚裏にきざすだろう。『新磨妹と背かゞみ』（明治十九年。以下『妹と背かゞみ』）に「肚の裏」が多く使われている（この作品の心内語については、宇佐美毅「『新磨妹と背かゞみ』の方法」に分析がある。『国語と国文学』昭和六十一年六月号）。その「肚の裏」の典型を示しておこう（振り仮名は省略した所が多い）。お菊が用意した夜食を奥様のお辻は胸がつかえて食べられないと言う。そのあとの場面である。

（菊）左様でございますか。

ト不審顔して次の間へ。膳は退ても気ハすまず。肚の裏にて。

小指め何を気に障たか。帰家がすこしばかり遅かツたツて。そんなに腹をたゝないでも……今までが人を使ツた事がないもんだから。昼でも夜でもほんに〳〵。あんまり人使ひが荒いから。一寸使に出た序かなんかに。ヘン。ちつたア息休めをしないじやアたまるもんか。ほんとにこゝの小指ほど察しのない小指ハありやアしない。八十円から取る旦那のお細君にハ不釣合だ。裏店の細君が相応だア。何かにつけて（口を切餅形にして歯をむきだし）コセ〳〵。ケチ〳〵。今朝なんぞも八百屋さんが笑はア。三銭五厘の大根を三銭に負ろツさ。それもいゝが三銭に負らなけりやア二厘に負ろツて。それでも負ないので到底三厘。此家なんぞで二厘ばかし何だ。負たツて負なくツたツて○それもほんとうに負たのならまだしもだが。八百屋さんも如才ないや。また値切るぞと思つて居るから。何時も二厘宛高くいはア。生意気に値切つても。もとが裏店の鼻ツ垂しだから。物の買やうも碌そつぽうにやアしらない。高いものを買ツて。へん喜んで居らア。（第十二回。「明治文学全集」16『坪内逍遥選集』によったが、振り仮名は省略したところがある。なお、『逍遥選集』別冊第一の本文では、「肚の裏」は「肚の裏」、「到底」は「到頭」、「大根」は「大根」）

「小指」はお辻を指す。お辻は水沢達三と釣り合わぬ結婚をして、のち自殺する女性である。ここでのお菊の「肚の裏」は、決断・決心の場ではなく、他人を標的にして何かを思いめぐらす場である。対他の意識が燃え盛る場である。「慎独」の倫理からは遙かに遠い。

ト打笑みながら。窃に肚の裏に快からず「扨ハ逸早くも何人より歟。例の若里に関する事をバ。をかしく誤聞せしに因る事なるべし。我身に昏き事のあるにもあらねど。つまらぬ疑ひを蒙るものかな。但しあの理由を箇様々々とこゝにて物語るも間の悪き事なり。我身の不名誉を浄うせんとて。父御の「アラ」をいふハ異なものなり。到底後になれバ解る事ゆゑ。只々何となく「ゴマカシ」ておくべし。然し誰が斯くハ告口せしにや。忽地聞えるにハ恐れる事よ」ト斯様に思ひながら素知らぬ振にて。「まるきり覚えなし」ト弁解するを。（第十四回。『逍遥選集』別冊第一の本文では、「父御」は「父上」）

ここの「肚の裏」は、恩義のある木村という人に若里との仲を誤解された水沢のものである（水沢は父親の無責任な遊蕩の後始末のために若里に近づいたのであった）。小説に世態人情を標榜した逍遥は、『八犬伝』の「肚裏」批判をこのような形で小説作品でも実行して見せたのである。

その批判の露骨な例も示しておこう。お辻と結婚する前、水沢はお

雪が好きだった。しかしお雪が自分を嫌っていることを立聞きしてしまう。水沢は、「心につく〴〵思ふやう、扨ハお雪は内心にハ。斯くまで我身を嫌へるにや」と思うと、今度はお辻の姿が眼前にはっきりと見えてくる。

とまた踏迷ふ思案の外道。意馬心猿の載てゆく此煩悩の旅路こそ。行衛定めぬものなりけれ。（第四回）

八犬士にはないと言って批判した「意馬心猿」をここでこれ見よがしに使っている。また、第六回では、水沢のお辻との結婚に関する思惑を述べたあと、「トいろ〳〵さま〴〵に思ひ惑ふも。所謂道理力の指揮にハあらで。煩悩の犬のわざくれかといとをし」と、ここでもまたわざとらしく見えるほど露骨に「所謂道理力の指揮にハあらで」と書いている。先述のように逍遥は、八犬士を導いたのは「道理力」と解していた。逍遥にとって道理力ははじめからあるものではなかった。『妹と背かゞみ』第五回で、「人をして道理の力を覚えず用ひしむる原因」として、義理と人情をあげている。「社会在来の二大覇絆」である義理と人情はどこから起こるのか。「其源ハ大別して二箇の関係の中にあるべし。一ツハ当人と世間の関係。一ツハ当人と父母兄弟并に親族との関係なり。父母親族への義理を思ひ。世間の所思をバ兼れバこそ。忍びがたきの事を忍び。制しがたきの欲をも制へ。さま〴〵気兼をする事なれども。若し此二ツの関係なくんバ。誰か道理力を用ひんとなすべき。」と書き、第十一回では、お雪について「物の道理をも弁へたれバ。いかでか親々の眼をしのびて。仇なる縁などを結ぶべきや」（『逍遥選集』別冊第一の本文では、「結ぶべきや」は「結ぶべしや」）と記している。水沢達三には父母がいない。だから作者は、母の写真を登場させて、水沢の痴情を制止しようとしている。八犬士の先験的な道理力とは違うと言いたいように見える。『小説神髄』「小説の主眼」で強調した、「劣情」と争って勝つ「道理」「道理力」の具体的な出所を示したとも言えようが、その実この「二箇の関係」はまだその条件にすぎない。

次は二葉亭四迷の『浮雲』の「肚裏」の例である。周知のように二葉亭と逍遥は深い交渉があった。

①説話が些し断絶れる　文三ハ肚の裏に「おなじ言ふのならお勢の居ない時だチョツ今言ツて仕舞はうト思ひ決めて今将に口を開かんとする……（第四回）

②お勢と顔を見合はせると文三ハ不思議にもガラリ気が変ツて咽元まで込み上げた免職の二字を鵜呑みにして何喰はぬ顔色　肚の裏で「最うすこし経ツてから」（第四回）

③文三は憤然として「ヨシ先が其気なら此方も其気だ　畢竟姥と思へばこそ甥と思へばこそ言度放題をも言はして置くのだ　ナニ縁を断ツて仕舞へば赤の他人他人に遠慮も糸瓜も入らぬ事だ……糞ッ面宛半分に下宿をして呉れやう……」ト肚の裏で独言をいふと不思議やお勢の姿が目前にちらつく（第五回）

④あれも厭なり是れも厭なりで思案の糸筋が乱れ出し肚の裏では上を下へとゴツタ返へすが此時より既にどうやら人が止めずとも遂には我から止まりさうな心地がせられた（第五回）

⑤尋ねて見ると幸ひ在宿　乃ち面会して委細を咄して依頼すると「よろしい承知した」ト手軽な挨拶、文三は肚の裏で「毒がないから安請合をするが其代り身を入れて周旋はして呉れまい」ト思ッ

て私に嘆息した（第八回）

⑥ト自己が言ふ事だけを饒舌り立てゝ人の挨拶ハ耳にも懸けず急歩に通用門の方へと行く　その後姿を目送りて文三が肚の裏で「彼奴まで我の事を意気地なしと云はん計りに云やアがる（第九回）

①②は、文三が免職になったことをお政に話そうとして躊躇する場面、③④は免職と知ったお政が態度を豹変させたことに対する文三の思いと、腹癒せに園田の家を出て下宿しようとする決意が、お勢への恋心で変わるところ（お勢への恋心が介在するのは①から④まで共通する）、⑤は文三が再就職を石井という人に頼みにきた場面、⑥はもとの同僚で同じく免職になった山口に邂逅したあとの文三の感想である。すべて免職にかかわっておこる事態での文三の「肚裏」である。このことは内海文三および『浮雲』の特質を如実に示すものである。

『妹と背かゞみ』の場合も『浮雲』の場合も、「肚裏」はわだかまりの表現である。思いはどこかへ読者を導くのではなく、肚裏の内部にわだかまる。馬琴にあった儒学倫理の支柱がもはや彼らにはない。道理を自力で創り出さなければならない。しかし、逍遥と二葉亭の「肚裏」には違いがある。二葉亭は肚裏のありようをつきつめ、そのわだかまりの中に、道理のありかを見ようとしたのに対して、逍遥は肚裏を通過して、人は裏表のある存在だという思いに到り、そのことを執拗に描き出した。「人情をバ穿ちて周到な」ることは、逍遥の小説において人の裏表を余すところなくあばき出すことであった。そこに展開はない。

「二世曲亭馬琴」と名乗ったこともある（明治十八年九月から数ヵ月）山田美妙は、『妹と背かゞみ』や『浮雲』以前、英国のアルフレッド伝をもとにした『竪琴草紙』を書いた（前半部分は明治十八年五月）。馬琴読本の口癖を十分にこなしている（柳田泉の『政治小説研究』上巻「研究本紀」上の「『情海波瀾』と戸田欽堂」によると、明治十五年刊の欽堂の脚本『薫兮東風英軍記』はアルフレッド伝をもとにしているらしい）。念のためそれらを摘記しておこう（本文は、山田俊治・十重田裕一・笹原宏之編『山田美妙『竪琴草紙』本文の研究』による）。「ことのもとをたづぬるに此頃丁抹の海辺に枯樹嵐てふ海賊あり」、「頓て配下を召集へて緒由を解示し」、「然るべき方法の出るにあらねば緒趣恁々と威塞に在すなる葉策烈に聞上げ」、「閑話休題」、「畢竟今此雑兵が亜弗勒に注進の後の物語甚麼ぞや其ハ次巻に於て解なん」、「茫然と呆るゝこと半時許り」、「雑兵二人が事此下に物語なし」、「此時遅し那時早し」、「言葉敵」「句」「今は得失地の易しを」「造化精妙といひつゝも」「造化の妙契奇なる哉」等々。本稿では省略するが、内容的にも『八犬伝』に類似のものが多い。

このように『八犬伝』の文章の練習帳のようにさえ見える『竪琴草紙』には、しかし、「肚裏」は次の一箇所にしか使われていない。

盲人ども忝くも枯樹嵐の大王が陣中の徒然なるまゝ汝等に一弾弾かせ玉ふといふなる此方に来よといふほどに仕済したりと亜弗勒等主従三人は肚裏に思へど故意と左有らぬていにてこは有難くこそ候へ（略）（第十五回）

しかし、心内の表現は「心裡に」を筆頭に、「肚に問ひ肚に答へて」「我に問ひつゝ我に答へ」「独心に」「心のうちに」「心に思ふよう」「独心に思案するに」などに導かれ、叙事に回収されていく。要するに、逍遥に追随しただけの山田美妙は（山田有策「初期美妙の文学観——

「竪琴草紙」。『幻想の近代』所収）、「肚裏」という言葉に自覚的でなかったのである。

では、『妹と背かゞみ』前後、逍遥は「肚裏」をどう使ったか。散見する例のうち対他の意識の強い二例だけ示しておこう。ともに翻訳・翻案小説である。

「令門士」は漸く頷諾、和尚の言語に従ふものから、尚肚の裏には嘲笑ひて、此奴賢明ぶりてかく実しやかに彼女のことを告れども、然る道理あるべきやは、遠からずして美人は真の人間なるよしを知らしめ、鼻明せてんと思ひつゝ、最慇懃に辞を告て、当日は館へ帰りけり、（明治十三年四月刊『春風情話』第四套）

栗栖は肚のうちにて、偽言を言へ、あの老人の眼附で神経質、臆病、とんだ事アベコベに乱暴ものゝ方で怖がつて逃よう余人はしらず探偵係だ眼がちがふぞ其手でだまされてたまるものか、栗栖はひそかに打笑みながら態と無頓着のやうなる口気にて「それでは貴嬢も番をするなとおっしゃるのですか」（明治二十年、『贋貨つかひ』第三章）

逍遥の隠匿する「肚裏」は人の裏表と隣り合わせの位置にまで至っていた。

次は『細君』第一回の一節である（明治二十二年）。解雇されたおさんの女主人に関する「散々に無法な蔭口」である。

夫人は素と相応な官員の娘にて師範学校をも卒業せし事　主人が書生上りなりしころ婚礼せし事　さういふ女書生だから台所の事は真闇で　イヤに勘定の細かい癖に人を使ふ呼吸を知らず　目端が少しもきかぬ癖にヲツに世話を焼きたがる（新日本古典文学大系『坪内逍遥　二葉亭四迷集』による）

これはさきに引いた『妹と背かゞみ』のお菊の肚裏の中味と同じような悪口を、口外したらこうもなろうかという形で示している。『松のうち』（明治二十一年）を含め、逍遥は次第に「肚裏」という言葉の露出をひかえ、小説全体を対他的な肚裏の転位した世界に作っていく。達者な戯文で脇から政界の動向を描く『小説外務大臣』（明治二十一年）は、人の世の仕組みを変容するかと思える魅力を持っているが、小説展開の動力は、人の噂と人の裏表である。逍遥が繰返し主張した「人情」は、実は人の裏表であり、人の噂（品評）に終始することであった。そう思われるほどその描写はいきいきとしている。馬琴が肚裏においても天下の公道をめざしたのに対し、逍遥はあえて肚裏をもって天下の私道に変えようとしたと言ってよい。しかし、人の裏表、人の噂を小説の動因として描き続けるだけでは、つまり「心のうちの内幕をバ洩す所なく描きいだして」「人情をバ灼然として見えしむる」（『小説神髄』「小説の主眼」）だけでは、ついに新しい道理、道理力は生み出せなかったのである。しかしこのことは、逍遥自身がもっともよく感知していたことであっただろう。